東京純心大学紀要　看護学部　第8号（2024）pp.69 ～ 76

資料

東京純心大学における地域貢献事業「パパママ学級」の実際
A Report on the Practice of the “Papa Mama Class” Community Contribution Project at Tokyo Junshin university

時　田　純　子

Key words：大学、地域貢献事業、子育て支援、パパママ学級、助産師

Ⅰ．はじめに

大学における地域貢献事業は、教育と研究活動と並行して行われ、地域社会と共に発展することを目指す重要な取り組みである（文部科学省, 2021）。

群馬大学（2023）の地域貢献事業は、人材育成、地域課題の解決、医療・保健・福祉、文化交流、小中学生に対する理科体験教室など様々な活動を通して地域に貢献している。これらの活動は地域住民のニーズに応え、地元の発展に寄与するため、大学の教育研究の成果を社会に還元する形で行われている。一方で、愛知大学（2023）の地域貢献事業は「学生地域貢献事業」を展開している。これは、学生たちが講義や実習で学んだ知識を活かし、地域の課題を見つけ、地域の人々と一緒に解決策を考えるプロジェクトである。2011年（平成23年）から始まったこのプロジェクトにはこれまでに141グループ、2000人以上の学生が参加し、地域活動を展開している。そして、これらの活動は「愛知大学地域連携活動報告書」としてまとめられ、ウェブサイトで公開されている。このように、大学の地域貢献事業は、地域の課題解決と地域の活性化に対する重要な取り組みとなっており、地域から求められていると言える。

2021年（令和3年）、東京純心大学は地域貢献事業の一貫として、出産前後の母親とそのパートナー向けの子育て支援プログラム（以下プログラムとする）を開始した。このプログラムの目的は二つあり、一つ目は地域社会への貢献、二つ目は学生たちに実践的な学びの場を提供することである。活動内容としては、育児技術習得のための支援や相談、そして出産後の子育て支援講座である。これらの活動を通じて、大学は地域社会に対する役割を具体的に示し、地域全体の保健福祉の向上に貢献することを目指している。以下では、このプログラムの変遷と、現在の活動内容について詳しく紹介する。

Ⅱ．大学における地域貢献事業

文部科学省（2011）によれば、大学（短期大学を含む）に求められるものは、地域や社会の知識の拠点として、住民の生涯学習や多種多様な活動を支えると同時に、地域や社会の課題を共に解決し、その活性化や新たな価値の創造へ積極的に貢献することであるとしている。また、文部科学省の報告書（2021）「これからの時代の地域における大学の在り方について－地方の活性化と地域の中核となる大学の実現－」によれば、大学の使命は歴史的に教育と研究であったが、社会情勢の変化に伴い、その役割も変化している。現在、大学は教育と研究に加えて、社会貢献（地域社会・経済社会・国際社会等、広い意味での社会全体への発展への寄与）を大学の「第三の使命」として位置づけている。

この背景を受けて、内閣府（2023）は「地域

中核大学イノベーション創出環境強化事業」を開始した。この事業では、地域の中核となる大学が独自のビジョンに基づく強みや特色を活かし、地域のニーズに即した社会貢献活動を推進し、活動を通じて地域行政や産業界からの投資を促進し、大学の財源多様化を進めることを支援するものである。

これらのことから、大学は教育・研究に限らず、地域貢献を含めた社会貢献も重要な使命として位置づけられており、その役割は増している。

Ⅲ．東京純心大学看護教育実践研究センターの位置づけ

東京純心大学看護学部に附設されている看護教育実践研究センターは、以下のような活動を行っている。

1. 看護学生の看護実践能力・研究能力の育成に関する事業
2. 看護教員の教育力・看護実践能力・研究能力の向上に関する事業
3. 地域住民の健康な生活（いきがい）づくりに関する事業
4. 地域のネットワーク構築に関する事業

また、東京純心大学の地域貢献事業も看護教育実践研究センターの管轄下にある。

Ⅳ．子育て支援プログラム「パパママ学級」活動の変遷

1．2020年度（令和2年）～子育て支援活動に向けての準備

2020年4月（令和2年）に新型コロナウイルス感染症（以下Covid-19感染症とする）の緊急事態宣言が発令された。これを受けて、東京都と東京都助産師会から依頼を受けた地域の子育て支援団体は、WEB会議システム（以下オンラインとする）で子育て相談の支援を開始した。この相談は、妊婦、新たに母親となった女性、そしてそのパートナーを対象としており、参加者が多い場合、オンラインで、妊婦と新たに母親となった女性のグループや子どもの月齢別のグループなどに分けて、それぞれの相談に対応した。支援の効果を明らかにする目的で行った調査（時田, 2023）では、参加者は、Covid-19感染症の広がりにより妊婦健康診査や保健指導を受けることが難しくなり、情報不足や誤情報による疲労感、自宅から出られない孤独感や孤立感を感じていた。一方で、支援を受けることで、直接対話が可能であること、感染の心配なく参加できること、場所や状況に関係なく参加できるというメリットを感じ、Covid-19感染症がもたらす孤独感や孤立感の問題を軽減できていることも明らかにされた。

これらの経験から、オンラインでの相談は、出産に向けて不安を感じる母親にとって重要な支援システムとなっていることが明らかにされた。

2．2021年度（令和3年）～ Covid-19感染症流行下で開催された子育て支援

2021年度（令和3年）、当大学と八王子市・日野市を管轄する八南助産師会との共催で、子育て支援プログラム「パパママ学級」を企画・開催した。参加対象者は、妊婦、新たに母親となった女性、そしてそのパートナーであり、開催方法は、Covid-19感染症罹患への不安を考慮し、全てのプログラムをオンラインで行った。プログラムは、子育てに関する相談や、妊婦ヨガ、授乳やオムツ交換等の実技指導であり、プログラムは八王子市や八王子市教育委員会の後援を得て実施した。2021年度は10回の講座を開催し、年間参加者数は30組であった。

3．2022年度（令和4年）以降～緊急事態宣言解除後の対面による子育て支援

2021年9月（令和3年）にCovid-19感染症の緊急事態宣言が解除されたことを受け、2022年度（令和4年）は対面形式での講座を開始した。しかし、Covid-19感染症罹患に対する参加者の不安を考慮し、全面的な対面形式ではなくオ

ンラインと対面形式を隔月で計画した。

プログラムは、妊娠期から子育て期への連続した支援を目指し、妊婦の出産準備教育に加え、出産後の子育て支援に関する内容も企画した。出産準備教育では、沐浴を中心とした講座を開講し、子育て支援では「絵本講座」と「おもちゃ講座」をテーマにした講座を開講した。子育て支援講座は、幼児教育の専門家である東京純心大学現代文化学部こども文化学科の教員に講師を依頼した。2022年度は、対面形式の講座5回とオンライン講座5回の合計10回を開催し、年間参加者数は50組であった。

Ⅴ．2023年度（令和5年）の活動の実際

1．子育て支援プログラム「パパママ学級」の企画

東京純心大学現代文化学部こども文化学科の教員を引き続き講師に迎え、看護学部との共同企画とした。プログラムは6月から翌年3月までの期間で、その間に6回の講座を開催した。対象者は、妊娠中期以降の女性、乳幼児の母親、そしてそのパートナーであり、会場の広さや安全を考慮し、各回の定員を5～8組（最大24名）に設定した。講座は、出産準備教育（特に沐浴に焦点を当てたもの）を3回、そして子育て支援の「赤ちゃんと絵本」、「赤ちゃんと音楽あそび」、「赤ちゃんとおもちゃ」をそれぞれ1回ずつ開講した。全ての講座は大学校舎の母子看護学実習室とリトミック室で対面形式で行われた。企画の中で最も重視したのは参加者の安全で、そのために専門家から意見を求め、運営を計画し、内容をスタッフ全員で共有した。

2．地域貢献事業開催に関わる手続き

1）企画：講座内容に応じて、八王子市の助産師、保育士ら子育て支援の専門家と、当大学の幼児教育の専門家に講座への参加協力を依頼し、快諾を得た。その後公文書で依頼した。

2）活動申請：東京純心大学看護学部看護教育実践研究センターに、「地域貢献事業」として活動申請を行った。

3）後援依頼：大学の子育て支援事業として、八王子市および八王子市教育委員会の後援を得るための手続きを行った。

4）広報①：「パパママ学級」のチラシを作成し（図1）、東京純心大学ホームページ「看護教育実践研究センター」に掲載を依頼した。

5）広報②：チラシは、八王子市内の全公立保育園、子ども家庭支援センター、児童館などの公的施設に配布した。また、八王子市内の3カ所の保健福祉センターには、母子手帳を配布する際にチラシを同封していただくように協力を依頼した。さらに、周知のために、保健福祉センターの担当保健師に相談し、3～4カ月健康診査の予定に合わせて、教員が直接会場を訪れ母親らにチラシ配布を行った。

6）参加者対応：申し込みは、電話又はオンラインで受け付け、問い合わせ先は当大学の母性看護学領域の教員が対応した。

7）学生ボランティアの登録：学生ボランティア募集は、母性看護学などの講義で周知した。学生が実習や試験期間などを考慮して

図1．2023年度「パパママ学級」開催案内

参加できるように、自由参加とした。参加者が少ない時は、学生参加は先着順とし、人数を制限した。また、学生ボランティアは、東京純心大学後援会より参加のための交通費一部支援があることから、「ボランティア申請届」を教員が学生課へ提出し、登録手続きを行った。

3. 講座の実際

1）開催までの準備（表1）

準備は大きく分けて、前日までの準備と当日の準備の2つに分けられる。前日までに【参加者】、【スタッフ間】、【外部】の調整と、【会場】の設営を行い、当日は、スケジュールを含めた最終チェックを行った。表1に具体的内容を記載した。

表1. 開催までの準備

前日までの準備
【参加者】
・申込の対応
・参加者との連絡調整（申込～開催後）
・参加者への案内送付
【スタッフ間】
・教員・助産師の出席状況確認と調整
・学生ボランティアの募集と連絡調整
・担当決定と、担当の役割内容についての説明
【外部】（大学学務課）
・東京純心女子学園付属中学校・高等学校の行事を確認
・正門守衛室への参加者来校と対応の依頼
【会場】
・会場の準備　・自家用車で来校される方の駐車場確保
・大学構内案内の看板設置
・大学校舎内案内の看板設置
・健康サポートセンター（救護室）使用の依頼
当日の準備
・健康サポートセンター（救護室）の準備
・会場の準備と最終確認
・手指消毒用アルコールの補充と非接触型体温計の作動状況確認
・参加者の誘導
・参加者の体調確認と手指消毒、マスク着用の依頼
・参加者を会場へご案内
・遅刻者、欠席者対応

2）講座の実際（活動の一例を紹介する）（図2）

（1）沐浴体験講座　【教科書通りの沐浴体験】

①事前準備

沐浴体験の目的は、家族全員の参加により、育児への積極的な関与、育児への理解と協力が深まることである。そのため、家族毎に沐浴体験できるテーブルを準備し、沐浴体験がたくさんできる時間を確保した。また、スタッフは、母性看護学の助産師資格を持つ教員、ボランティア学生、大学以外からは、子育て支援の専門家である保育士、八南助産師会の助産師で構成されたが、各テーブルにスタッフを配置し、指導や質問に対応できるように計画した。また、家族がいつでも着席できるように、背もたれのある会議用椅子を準備した。

②デモンストレーションと体験の実際（表2）

新生児の抱き方や更衣の方法を含む沐浴のデモンストレーションは、助産師会の助産師または大学の助産師資格を持つ教員が行った。参加者は当大学の学生が作成した沐浴のパンフレットを参考にしながら、デモンストレーションを真剣に見学した。その後、各テーブルで沐浴体

図2. 2022～2023年度「パパママ学級」開催のポスター
（参加者の許可を得て掲載）

表2. 講義のスケジュール（沐浴の場合）

スケジュール	内容と注意点
集合 注意事項の確認	・母子実習室に集合 ・スタッフの健康チェック ・最終参加者の確認 ・各担当箇所の注意事項を確認
駐車場誘導 会場誘導	・駐車場の案内、妊婦を安全に誘導 ・手指消毒・体温測定・会場へのご案内
受付 会場接待	・体調配慮が必要な方を確認 ・写真撮影（広報協力）の同意書を依頼 ・会場内の説明と各テーブル担当者の挨拶
開催の挨拶	・スタッフ全員の自己紹介 ・タイムスケジュールの説明 ・注意事項の説明
デモンストレーション	・デモンストレーションが見学できる位置に誘導
沐浴体験	・テーブル毎に体験 （2名以上の担当を配置し、支持的に関わる）
座談会・質疑応答	・参加者の自己紹介・質疑応答

験を行い、その過程を助産師や大学教員、ボランティア学生が見守った。参加者のほとんどが初めての沐浴体験で、約40分間で妊婦とパートナーが沐浴体験を繰り返し行った。その間、「赤ちゃんが思ったより重い」「腰が痛い」「コツがわかった」などの感想（星野, 2023）や質問が寄せられ、笑い声も聞かれ和やかな雰囲気の中で活動が行われた。体験の後は、参加者全体で座談会を開き、沐浴体験やその他の質問について助産師や教員が答えた。

参加者は、地域で活躍する助産師と話す機会を得て、出産後にいつでも相談できる相手として知り合うことができたことに満足していた。また、各テーブルに配置された助産師や教員、学生ボランティアの存在により、話しやすく温かい雰囲気が作られたとの感想をいただいた。

（2）絵本講座　【赤ちゃんと絵本】（図3）

①事前準備

絵本講座は、親子の絆の強化、子どもの発達の促進、そして親自身の成長を含めた子育て支援を目指している。そのため、講座の講師として、幼児教育の専門家である東京純心大学現代文化学部こども文化学科の教員に講師を依頼した。会場として、子どもたちが自由に動き回れる広さを持ち、音楽を再生する設備の整ったリトミック教室を準備した。乳幼児と家族が自由にくつろげるように、フロアマットを敷いた広いスペースを確保した。また、妊婦が参加する場合には、背もたれ付きの会議椅子を準備した。会場には、乳幼児の発達段階の合わせた絵本を多数用意し、参加者が手に取って見られるようにテーブルに並べた。さらに、読み聞かせ用の大型絵本も準備した。授乳期の母親のために、講義室とは別に授乳室を設けた。

参加者には手指消毒やマスク着用を依頼し、室内換気を行うなど、Covid-19感染症への対策を実施した。スタッフは、講師の他にも、母性看護学の助産師資格を持つ教員、学務課事務員、ボランティア学生、そして、八王子市公立保育園の元園長、八南助産師会の助産師など、全員で参加者に対応した。スタッフは常時10名程度おり、開催前にタイムスケジュールや、開催時の安全について情報共有を行い、それぞれが役割に応じて準備を行った。

図3. 赤ちゃんと絵本講座
（参加者の許可を得て掲載）

②講義と読み聞かせの実際

参加者は、乳幼児（4～5か月から2歳）を育てる母親とそのパートナーや、妊娠中の母親とそのパートナーであった。講義では、子どもの月齢に応じた絵本の選び方と読み聞かせ方法を学び、親が子どもと一緒に絵本を読むことで親子の交流が増えて、絆が深まり、子どもの心が育つというメッセージが伝えられた。さらに、絵本が子どもの言語発達と認知発達に有効であることも強調された。参加者は子どもの世話をしつつ、配布された資料にメモを取りながら講義に集中していた。スタッフは、参加者が講義に集中できるよう、子どもの世話を行うなどの配慮をした。また、幼児教育を学んでいる学生による絵本の読み聞かせを通じて、子どもとの適切な関わり方も伝えられた。参加者は、最初はテーブルに並べられた絵本の種類の豊富さに感動していたが、講義を受けた後は、自分が興味を持った絵本を選び、手に取り自分の子どもに読み聞かせをしていた。講師は、その際も母親が選んだ絵本の良さを説明し、各絵本の選び方のポイントを伝えていた。参加者からは、多くの絵本の中から絵本を選ぶ視点を学んだという感想が聞かれ、講義後には夫が本屋に行き、絵本を購入してきたという感想も寄せられた。また、夫と一緒に参加できたのは良い機会だったという感想も多くみられた（星野, 2023）。この経験を通じて、参加者は絵本の読み聞かせの重要性を理解し、子どもの成長と発達を支える新たな知識と技術を習得していた。

3）活動の評価

私たちのプログラムの効果は、参加者からのインタビュー調査結果を分析して評価した（星野, 2023）。この分析から、プログラムが参加者に具体的な子育ての方法を教え、家族の絆を深めることができたことが分かった。「夫」や「パパ」が子どもと一緒に楽しむ講座に参加することで、家族全体が得る利益が強調された。また、専門家らによる講座は、参加者に深い知識を提供し、参加者の満足度を高めた。「赤ちゃんが思ったより重い」「ベビーバスの高さによって腰が痛くなる」など、インターネットだけでは得られない具体的な知識も提供できた。

学生からの感想も肯定的で、学生は、赤ちゃんの人形を抱っこしたり、沐浴を行うご夫婦の姿を見たり、ご夫婦と交流することで学び、楽しい時間を過ごしていた。このように、学生が地域貢献活動に参加することで、彼らは社会的な問題についての理解を深め、学んだ知識を実際の状況で使う機会を得ることができた。これは、学生にとって非常に価値のある経験であり、大学が提供できる重要な学習の一部であると考える。

今後の課題としては、参加者と学生双方が得られる利益と学びを最大化する方法を探求することだと考えた。

Ⅵ. 今後の課題

大学が子育て支援を通じて果たす地域貢献事業の役割を明確にすることができた。これらの取り組みは、大学が地域社会に果たすべき役割であり、地域全体の保健福祉の向上に寄与する。

しかし、大学で教員が主体となって行う事業運営の難しさは、講義、演習、実習、研究活動、大学行事、学生指導などの多岐にわたる業務をこなすことである。具体的には、参加者やスタッフと日々連絡調整を行い、参加者のニーズに合わせて週末に開催されることが求められる。事業が地域に受け入れられ、規模が拡大すると、教育や研究とのバランスを保つことが一層難しくなる。現在、当大学でのプログラムは、一人一人の皆様への丁寧な対応が高い評価を得ているが、負担が増える中での開催では、これまで提供してきた安全で満足度の高い内容を維持することが難しくなる。

地域貢献事業は、参加者はもとより実施者、学生ボランティア、事業に協力して下さった行

政や、長年連携を図ってきた子育て支援スタッフの評価を踏まえながら、事業を進める必要がある。そのため、次年度は、再来年度以降のプログラム再開に向けて、より良い事業を開催できるように準備期間としたいと考える。これらの「準備期間」について、大学に説明し了承を得た。

一方で、当大学のある八王子市は、大学・短期大学・高等専門学校が21校存在し、約10万人の学生が学ぶ全国有数の大学都市である（2022）。それぞれの大学では、地域貢献事業として様々な取り組みが精力的に行われている。その一つに大学コンソーシアム八王子がある。大学コンソーシアム八王子の設立目的は、八王子地域に多くの大学等がある地域特性を活かし、大学・市民・経済団体・企業・行政等が主体性を持って連携・協働し、地域の活性化、外国人留学生の支援、情報の発信、調査研究、交流促進等に取り組むことである。これにより、大学、学生、市民それぞれが地域に大学があるメリットを感じることができ、高等教育の充実、地域社会の発展並びに地域の国際化を目指すなど魅力ある学園都市の形成に向けた中心的な役割を担うことができる。2009年の創設以来、大学・市民・経済団体・企業・行政から構成される32の加盟団体が、連携・協働し、魅力ある学園都市に向けた各種の活動を展開している。具体的な事業内容としては、大学間連携事業、情報発信事業、学生活動支援事業、産学公連携事業、生涯学習推進事業、外国人留学生支援事業などがある。当大学からの参加はまだないが、八王子市は子育て支援に力をいれている都市として知られていることもふまえ、今後も地域と協力しながら発信していきたいと考える。

文献

愛知大学，FIELD NOTES，学生地域貢献事業への招待．https://field-notes.aichi-u.ac.jp/（2023年10月閲覧）

大学コンソーシアム八王子．https://gakuen-hachioji.jp/about/（2023年10月閲覧）

群馬大学地域貢献事業（2023）．https://www.gunma-u.ac.jp/research/res003/res003_001（2023年10月閲覧）．

八王子市公式ホームページ（2022）．市域の大学・短期大学・高等専門学校．https://www.city.hachioji.tokyo.jp/kurashi/shimin/002/a791636/001/p031711.html（2023年10月閲覧）．

八王子市子育て応援サイト．https://kosodate.city.hachioji.tokyo.jp/index.html（2023年10月閲覧）

星野沙織，時田純子，間中伴子（2023）．助産師が主催する大学の地域貢献事業の効果―インタビューデータを用いたテキストマイニング分析―．第64回日本母性衛生学会総会・学術集会．

文部科学省（2011）．開かれた大学づくり．https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/daigaku/index.htm（2023年10月閲覧）

文部科学省中央教育審議会大学分科会（2021）．これからの時代の地域における大学の在り方について―地方の活性化と地域の中核となる大学の実現―．https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360_00007.html（2023年10月閲覧）．

内閣府（2023）．令和5年度地域中核大学イノベーション創出環境強化事業．https://www8.cao.go.jp/cstp/daigaku/chiikichukaku_r5.html（2023年10月）．

時田純子，青木智子，南幸子，竹元仁美（2023）．COVID-19流行による自粛期間中にオンラインによる育児支援に参加した母親の心理的変容．母性衛生，63（4），728-735.